

一 此金は、東朝を尋ふに建治年中、唐儀朝より
亦く二人有此人南天、渡り金は、妙を得て帰る後
其言もモツハラ是と日本、生朝を剛是正觀世音也
元弘元年申す成る也

文化十四
丁丑年改

宗運儀茂
朱中
改

古今通用金銭之割

一 竹流
人皇七十二代白河院所す、延金、通用是成
竹流、一と号す形丸く長く、百四、一と一挺

と号す今の小判百枚、相高は是と切く金の枚目と
換へ

一 黄金

人皇百四代後花園院所す、是利岳教將軍、一竹流
一とセツ、割く黄金一枚と極免通用は七十式
今の小判十枚、お高し

一 大判

人皇百七代正親町院所す、関白秀吉と、一竹流
三年乙未黄金と二ツ、割く大判一枚と極免通用は
三十二、今の小判七枚、お高し

一小判

人皇百八代後陽成院御宇

東照宮於後陽成院御宇二年辛丑大判と七り半と割と

小判一兩と極光通用と号又八も也

慶長元申

一小粒

小判と四つと割と丹尺一歩と号一母或も之大判小判

小粒相更通用と

一元字金

人皇百十四代東山院御宇將軍

常憲院殿御宇元禄八年乙亥改改一と兼金と

五分と式と割通用と

一乾金

人皇百十六代中河内院御宇將軍

文昭院殿御宇宝永七年庚寅改改一と兼金止

一新金

人皇百十八代中河内院御宇將軍

有章院殿御宇正徳四年辛卯如慶長改改一と小判と兩

四又八も小粒一分と又或も之

一文字金

人皇百十六代後陽成院御宇將軍

有徳院殿印時元文元年丙辰八月廿一日小判を以

て三文目二つ小粒を以て九分也

一 小判銀

一 明和四年より通用を以て

一 四文錢

一 同文目より通用を以て

一 南鏡銀

一 安永元年より通用を以て

一 二分判金

一 文政元年より通用を以て

一 三匁判金

一 三匁判銀

文化元年 當時町奉行より切金を取扱たる振合

一金百匁を以て拾匁迄を以て三月二分

一金拾匁以下同を以て

一 町奉行より金目を願出のしるすに頭支配申達同紙

一 儀務手紙申すに申事

一 一月近月謝不測のしるすに破許届りし事

- 一 大概を平禮も懸念不致の切金にお取事
 - 一 切金にお取事も論文を町奉行にお取事
 - 一 切金と評定おとす事
 - 一 評定おとす事以下金と不請取事
- 右出りの事記置

一 殿文字の事

御老申方より
 大納言 中納言 宰相 少将 百石以上 御目見以上 子村
 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿
 上より
 尾花大納言以上 中納言 宰相 加賀守 御目見以上
 殿 殿 殿 殿 殿

雜記の事

文化六年 柳原の事 数十年前仕一生國三列田原領の者世に
 集武格年いそ同玉堀義那の漢通不用何りて用事
 早里を先きの者首隆里乃序に若き時伊勢浦より
 江戸大廻り船以りて或時噴風と見えしを浦より
 十二人乗船と出りしれ遠君離の中程も思ふ事あり
 俄に西風強く沖の舟吹散れ色く何れと家と之も東
 とさしてり事矢のこく又大洋のうみ陸地百里餘
 隔れを沖へて境よりさきより結ぶ所の強風数の事なれ
 ち後より帆柱も折れ連も叶ぬ事と觀念はし津邊に